



Vol.30

ゆうことみゆきのふくふくトーク ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソノコ(=お便り)形式で
語り合います。

イラスト/安田千夏

チュプ(月)



お月見の季節ですね。月はアイヌ語で太陽と同じチュプといい、太陽と区別するときにはクンネ(暗い)を付けてクンネチュプとも呼ばれるの。月も太陽も天上から昼夜を問わず私たちを見守ってくれるカムイ(神)で暮らしに欠かせない存在。色の黒い月は男神、まぶしい太陽は女神とされ、夫婦神として語られる地域も。

チュプにまつわる言い伝えも多く、「三日月が真っ赤に見える」と凶、「大きな星が月を貫いたり、月の中に入ると身近な人が亡くなるか、火災が起こる」、「日没の太陽が青いと山獵が良い」、「日食のとき太陽が青くなると向こう一年は凶」等々……。

今でこそ皆既日食などは、観測ツアーが



組まれたりしてはしゃぐ傾向があるけど、かつてのアイヌ社会にとっては天界の一大異変だったんだよね。月や太陽が欠ける日月食は、チュプが死ぬという意味のチュプライイと呼んで、チュプが悪いものに襲われて弱る、病気になると思われてたんだって。昭和十一年の皆既日食の時、白老では古老夫婦が正装をしてチセ(アイヌ家屋)の屋根に上り、イナウ(木幣)を捧げ、夫人はヤナギの枝で天に水を振り撒いてチュプカムの回復を祈念する魔払いの儀式がおこなわれたんだって。

優子さん、秋の野にススキをわけて観る月もきれいだけど、海のそばで育った私は海上に浮かぶ月の姿が一番好き。満月が揺ら揺らと静かな波面を照らして、きらきらと映る景色は本当にきれいだ。眺めているだけで口マンチックな気持ちになるんだよね。



美幸さんつてば
夢見る乙女!

ところで、アイヌの人たちは月には何が住んでると考えてたと思う? 答えは、かぐや姫でもウサギでもなく「トランネ ヘカチ(怠け者の男の子)」。これにまつわる有名なカムイユカラ(神謡)が、北海道各地で言い



伝えられているの。

男の子に水汲みを言いつけたら、囲炉裏の杭をついたり叩いたりしながら「杭はいいな、水を汲まなくていいから」と言った。炉縁や戸口の柱にも、ついたり叩いたりしながら同じように言った。それから川に水を汲みにいったのに、それっきり帰ってこない。私は心配して、川を下りながら探した。途中で出会ったイトウ、アメマス、マスに行方を尋ねたが、どの魚も男の子から悪口を言われたからと言って教えてくれない。最後に出会ったサケが言った。「人間は自分のことを神の魚と呼んでくれるので教えてやろう。男の子は罰を受けて手桶を下げたまま月の中に立っている。」見上げてみると、その通りの姿で立っている男の子がいた。

これには、男の子の代わりに女の子が登場するなどいくつもの類話があるけど、いずれにせよ、人たるもの、怠けてはいけないという教えが込められているよね。月の中に男の子の姿を見た時の切ない気持ち、トランネ息子を育てた母親の一人として、痛いほどわかります。なくんて、かく言う私もしよつちゅう飲み過ぎて、大とらになつて寝てるけどね…おそまつ。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■安田千夏(やすだちか):神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。